

2022 年度 特別支援教育フォーラム

2022 年 4 月 27 日

和歌山大学特別支援教育

コーディネーターフォーラム事務局

info-seforum@ml.wakayama-u.ac.jp

第 106 回和歌山大学特別支援教育コーディネーターフォーラム

「特別支援教育におけるコンサルテーションとは」

和歌山大学教育学部 武田鉄郎

和歌山大学教職大学院、和歌山県立きのかわ支援学校 宮本公美

今年度は、9 回のフォーラムをオンラインで開催することとなりました。

初回は、4 月 27 日（水）18 時から、和歌山大学教育学部の武田鉄郎が、和歌山大学教職大学院、和歌山県立きのかわ支援学校の宮本公美氏をお迎えし講演しました。お忙しい中、55 名の方がご参加くださり、大変有意義なフォーラムになりました。

講演内容

講演題名：特別支援教育とコンサルテーション

講師：和歌山大学 教育学部

武田鉄郎

特別支援教育におけるコンサルテーションの目指すことは、子どもや教師などの困り感を軽減・解決することである。特別支援教育に関して専門性の持った教育センターの職員等がコンサルタントとして、実態把握から指導計画の作成や指導・支援に至るまでを行い、コンサルティである教師と連携・相談しながら、クライアントである子どもに支援を行う。その際、コンサルタントの基本的態度である、「黒子」として援助することや、コンサルティの所属する教師グループのチームワークを乱さないなどを心掛けることが大切である。

適切な支援・指導を行うには、子どもの実態を教師間で共有することや、教科指導の専門性だけでなく、人間を育てていくための専門性を高めていく必要がある。

講演題名：地域の園・学校におけるニーズ調査—アンケートを通して—

講師：和歌山大学教職大学院、和歌山県立きのかわ支援学校 宮本公美

地域の特別支援教育の中核としての役割を担うためのセンター的機能の在り方について検討するため、地域の園・学校にアンケート調査を実施した。

アンケートの結果、特別な教育支援が必要な幼児児童生徒が 8 割在籍し、発達障害の診断がある幼児児童生徒は 5 割在籍している。教育上、生活上の問題としては、就学前は「集団活動に参加しにくい」、就学後は「授業に集中しにくい」「不登校・登校しにくい」などの問題があった。また、特別な教育的支援についての問題として、保護者との連携、校内支援体制、進路などが挙げられた。

センター的機能の利用は約 5 割であった。センター的機能への要望からみえたことは、センター的機能の周知や、具体的な指導・支援方法を提示するなどの相談内容の充実、多種多様な専門機関との連携などが挙げられる。これらを実現することが、よりよいコンサルテーションの実現になると考える。

参加者の感想より

特別支援学校のセンター的機能に求められるもの地域の小中学校との連携について考えさせられるお話でした。手続きを簡素化し、支援学校と小中学校がより連携しやすい形を考えていなければならないと思います。武田先生のお話では、問題行動がある子どもに対して教師や関係機関がチームとして取り組むことこの大切さを学びました。

2022 年度 特別支援教育フォーラム

2022 年 5 月 25 日
和歌山大学特別支援教育
コーディネーターフォーラム事務局
info-seforum@ml.wakayama-u.ac.jp

第 107 回和歌山大学特別支援教育コーディネーターフォーラム

「特別支援学校におけるセンター的機能の実際と課題」

和歌山大学教育学部	武田鉄郎
和歌山県立紀伊コスモス支援学校	黒江純子
和歌山県立きのかわ支援学校	寺尾朗代
和歌山県立和歌山さくら支援学校	中谷 愛

今回は、5月25日（水）18時から、和歌山大学教育学部の武田鉄郎が講演いたしました。さらに、和歌山県立紀伊コスモス支援学校 黒江純子氏、和歌山県立きのかわ支援学校 寺尾朗代氏、和歌山県立和歌山さくら支援学校 中谷愛氏をお迎えし、各校のセンター的機能に関する実践と課題について詳しくお話しいただきました。

お忙しい中、58名の方がご参加くださり、大変有意義なフォーラムになりました。

講演内容

講師：和歌山大学 教育学部

武田鉄郎

学校教育法第74条や、特別支援学校小学部・中学部学習指導要領の総則において、特別支援学校は、幼稚園、小学校、中学校、高等学校等の要請に応じて、幼児児童生徒の教育に関し必要な助言又は援助を行うよう努めることが定められている。また、小中学校等の学習指導要領の総則にも、インクルーシブ教育システムを構築するため、特別支援学校のセンター的機能を活用することが記載されている。

特別支援学校の特別支援教育コーディネーターは、地域の幼稚園、小・中・高等学校のニーズのある幼児児童生徒や教員の教育相談などを行うことを通して、センター的機能を果たしている。この役割を果たすためには、障害のある幼児児童生徒の指導方法や、学級づくりなどの理論・技能を会得することや、児童生徒の指導に悩みがある教職員や、保護者の学校への要望など、ニーズを把握することが大切である。また、教育機関、福祉機関、保健・医療機関などと連絡・調整を行い連携することも大切であり、役割でもある。

講師：和歌山県立紀伊コスモス支援学校

黒江純子氏

校外支援として、来校や訪問による教育相談・巡回相談を行っている。地域の学校や保護者から、学習や行動面に関すること、就学・進学等の進路に関すること支援学校での学びや学校環境についての相談がある。訪問相談も行っており、園や学校に訪問して実際に授業の様子を見せていただいたり、関係者複数人と一緒にお話しさせていただいたりしている。

学校等のニーズに応じた研修協力を実施している。また、地域の先生方が対象のサマーセミナーでは、自立活動やWISC-IV、教材についてなどの研修を行っている。

講師：和歌山県立きのかわ支援学校

寺尾朗代氏

学び合いや情報提供の観点等から、様々なセンター的機能の取組が実践されている。

地域の保育園、幼稚園・小・中・高校や児童発達センターを対象とした、「校区内特別支援教育コーディネーター連絡協議会」を開催している。この協議会では、特別支援教育に関する情報共有や学び合いを行っている。また、特別支援教育に関する研究の中に、視覚支援として、みくまの支援学校、はまゆう支援学校、きのかわ支援学校がそれぞれの地域の主幹校になり、ろう学校と連携して聴覚の支援を実施している。

「地域特別支援教育等連絡協議会」を開催して、医療や福祉など他職種連携により事例検討を行って専門家の助言を受け、児童生徒の指導や支援につなげている。

講師：和歌山県立和歌山さくら支援学校

中谷 愛氏

地域のセンター的機能の役割として、学習面や情緒面等で気になる障害のある幼児児童生徒、保護者、関係職員を対象にした教育相談、学校間や居住地校等の交流、関係機関との連携を行っている。理解啓発としては、地域の小・中学校に対して、本校の教育や実践等の紹介など、特別支援教育に関する情報を提供している。

高等学校との連携が進められており、同じ敷地にある和歌山北高等学校西校舎とは2年前から教育相談が行われており、昨年度から通級による指導も開始された。通級による指導を始めるにあたり、学習環境の調整や生徒の実態を踏まえた取り組み内容に関して、両校による連携のもと検討を行った。生徒への取り組み内容として、コミュニケーションや整理整頓が苦手な生徒への指導等が行われている。また、進路に関する相談も多く、進路部と連携して支援学校における進路学習について情報提供を行っている。

参加者の感想より

- ・特別支援学校のセンター的役割について、校内や校外で実際にされている取り組みについてお話していただいたので、特別支援学校の特別支援コーディネーターはどのようなことをされているのかがよくわかりました。今は、高等学校にも通級指導教室が置かれ、少しずつ増えてきていることを知りました。発達障害のある子どもたちが、高等学校に進学しても、安心できる人や場所があることはとても良いことだと思います。通級指導教室の教師とつながることで、学校での悩みや卒業後の進路等についても相談しやすくなるように感じました。
- ・高校での通級指導教室の開始や、多職種連携での協議会の事例が聞けてとても参考になりました。高校で、5年前から通級での取り組みが始まり、今段階的に増加していることを知りました。今まで高等学校での支援があまり聞かれなかったので、中学校卒業後の進路について、学びの選択肢が広がり、制度化されることはいいなと思いました。高校での通級では、自分史をまとめたプレゼンや、プリントの整理の仕方など、学習や生活上の困難を改善するための具体的な取り組みがあることを知りました。内容が自立活動中心ということで、そこでは学習補充はできないのか、どのような子が通級の対象になるのか、また知りたいです。

2022年度 特別支援教育フォーラム

2022年6月22日

和歌山大学特別支援教育

コーディネーターフォーラム事務局

info-seforum@ml.wakayama-u.ac.jp

第108回和歌山大学特別支援教育コーディネーターフォーラム

「小学校の特別支援教育コーディネーター(通級担当者)の 実践から～地域の関係機関とのネットワーク作りを通して～」

和歌山大学教育学部 武田 鉄郎
御坊市市立御坊小学校 井元登貴男

6月22日(水)18時から、和歌山大学教育学部の武田鉄郎が、御坊市市立御坊小学校井元登貴男氏をお迎えし講演しました。お忙しい中、72名の方がご参加くださり、大変有意義なフォーラムになりました。

講演内容

講師：和歌山大学 教育学部

武田鉄郎

特別支援コーディネーターとは、子どもの障害に対する教職員の理解を高め、一人ひとりのニーズに応じた教育を実施するために、各校内で中心となって校内研修の企画・運営や教育相談の窓口などの役割を担う人である。

特別支援コーディネーターは、適切な支援を行うために、発達や障害に関する知識や技能を高め、学級担任の指導の悩みや保護者のニーズを把握して、担任や保護者へ支援を行っている。また、児童生徒への支援のために、教育・福祉・医療機関や地域の小・中学校、特別支援学校への連絡調整を行い協同的に対応できるようにしている。

講師：御坊市市立御坊小学校

井元登貴男

校内の取り組みとして校内委員会を開催し、子どもの実態把握や、これまでの支援の確認、今後の支援の方向を検討している。担任は個別シートを作成し、指導の検討や次年度の引継ぎ資料として活用している。就学支援としては、保・幼稚園に出向き、対象幼児の観察や発達相談を行っている。また、就学時検診の結果等の情報を聞いて入学後の支援を協議している。この取り組みによって、入学直後からの配慮と手だてが可能になる。中学校への引き継ぎでは「中学校への引継ぎシート」を用いて、小学校で行ってきた支援や配慮を中学校の教員に伝え、支援が途切れないように引き継ぎをしている。

地域での取り組みは、「御坊市発達支援検討会」を設置し、特別支援学級入級児だけでなく、入学後に要支援となる可能性がある通常の学級に在籍する子どもにも範囲を広げて、子どもの発達について情報共有や検討を行っている。この検討会は、他機関の専門家がメンバーとなっており、多方面から子どもをとらえることができる。また、早期発見、早期支援を行うことを目的に5歳児検診が実施されている。保健師や教員などが園に訪問して集団での行動観察等を行い、園の先生とカンファレンスを行っている。5歳児検診の実施は、支援について共通理解する機会となり、就学への支援をつなぐうえで関係者の連携がスムーズになっている。

参加者の感想より

- ・特別支援コーディネーターの役割が、これほど多岐にわたって広がりをもたせるものなのだという事を知り驚きました。小学校だけでなく、幼保から支援の必要な子どもをみていくというお話から、必要な支援を必要な子どもに確実にやっていくという強い信念を感じました。

2022 年度 特別支援教育フォーラム

2022 年 7 月 27 日

和歌山大学特別支援教育

コーディネーターフォーラム事務局

info-seforum@ml.wakayama-u.ac.jp

第 109 回和歌山大学特別支援教育コーディネーターフォーラム

「発達障害等でトラウマを抱え、不登校等二次障害を呈している 子どもの理解と指導・支援」

和歌山大学教育学部

武田 鉄郎

和歌山県立たちばな支援学校

畑 香織

7 月 27 日（水）10 時から、和歌山大学教育学部の武田鉄郎が、和歌山県立たちばな支援学校 畑香織氏をお迎えし講演しました。お忙しい中、213 名の方がご参加くださり、大変有意義なフォーラムになりました。

講演内容

講師：和歌山大学 教育学部

武田鉄郎

トラウマとは、個人が持っている対処法では対処することができないような圧倒的な体験をすることによって被る、著しい心理的ストレス（心的外傷）のことであり、学校教育においての子どものトラウマは、いじめや不適切対応などから起こると考えられる。

トラウマを抱えた子どもは、不安が高く自信がない。不適応状態、トラウマ症状に対しての支援の第 1 段階として、安心感をベースに「できない」と思い込んでいる生徒とともに、一緒に練習したり、モデルを示すなどして寄り添う。そして、第 2 段階として提案と交渉を繰り返し、参加の仕方や、やり方について話し合いながら進めていく。いずれも本人の選択・決定を尊重することが大切である。また、このような子どもに対して、「感情の外在化」を行うことで自分の感情の整理や言語化が可能になり、適応状態がかいぜんされ、自尊感情も高まることを明らかにした。

講師：和歌山県立たちばな支援学校

畑 香織

地域の中学校から入学する生徒は、傷つき体験や失敗体験を重ねており、自己肯定感やコミュニケーション力が低い傾向にある。問題を抱える生徒に対して、教員として何ができるかを考え、まずは安心・安全を保障して自分のことを伝える力をつけることに取り組み、卒業までにはコミュニケーション力と社会性の向上を目指したい。そして、生徒を担当が抱え込むのではなく、複数の教員が多様な価値観を見せチームで支援していきたいと思った。

今年度から、自立活動の充実と細やかなチーム支援を目指し、「ここ・からスタート」という自立活動と体育を組み合わせたような授業を始めた。人間関係の形成や心理的な安定を図ることができ、「自分も出来る、認められた」という意識に繋がっている。

A さんは自閉症と知的障害があり、地域の小・中学校では人間関係でトラブルになり不登校や転校を繰り返していた。A さんは困り感を抱えたときに、暴れることで気持ちを伝えていたが、教員が作成した絵カードとシールを提示して気持ちを伝えるようにした。これを外在化という。このカードとシールは、感情にネーミングをつけ不快感情を分化できるように「笑い」と「手でのやりとり」を大切にして作成した。今では、「切ない」「後悔」など気持ちを細分化することができ、言葉で気持ちを伝えられるようになった。

参加者の感想より

- ・「共感的な協働」と外在化が印象に残りました。子どものネガティブな感情も含め、丸ごと受け入れることから始まると思います。本人の選択、決定を大事にしながら寄り添いこれからも支援をしていきたいと思います。

2022 年度 特別支援教育フォーラム

2022 年 9 月 21 日

和歌山大学特別支援教育

コーディネーターフォーラム事務局

info-seforum@ml.wakayama-u.ac.jp

第 110 回和歌山大学特別支援教育コーディネーターフォーラム

「発達障害のある人及び家族への支援について」

和歌山大学教育学部

竹澤 大史

和歌山県発達障害者支援センター「ポラリス」

辻 幸代

9 月 21 日（水）18 時から、和歌山大学教育学部の竹澤大史が、和歌山県発達障害者支援センター「ポラリス」の辻幸代所長をお迎えし講演しました。お忙しい中、44 名の方がご参加くださり、大変有意義なフォーラムになりました。

講演内容

講師：和歌山大学 教育学部

竹澤大史

発達障害者支援センター運営事業として、全国の都道府県、指定都市に発達障害者支援センターを設置している。目的は、発達障害のある人と家族に相談、発達、就労の支援を行うことであり、その他にも、関係機関との連携、研修、普及開発などの支援も行っている。和歌山県では、任意事業者としてポラリスが委託されている。

また、発達障害児者及び家族等支援事業として、発達障害者の家族がお互いに支え合うための活動等を行うことを目的に、ペアレントメンターの養成や活動の支援、ピアサポートの推進及び青年期の居場所作り等を行い、発達障害児者及びその家族に対する支援体制の構築を図っている。

講師：和歌山県発達障害者支援センター「ポラリス」

辻 幸代

和歌山県発達障害者支援センターポラリスでは、幼児期から青年・成人期まで一貫した支援事業を行っており、成長過程を一緒に伴走するという思いで支援活動にあたっている。相談者の内訳は、未診断の方が半数以上を占めていて、学校や職場での集団生活の場で、様々な困り感を抱えることが相談のきっかけになっている。ポラリスでは、このような相談支援事業のほかに、コンサルテーション事業、就労支援事業、普及啓発事業を行っている。

発達障害がある人の相談支援を成立させるためには、視覚的に情報を提示する、具体的に肯定的な言葉のやり取り、相談のスケジュールの提示、感覚や感情コントロールへの配慮を心掛けている。また、学校等に訪問して行うコンサルテーション支援は、支援者の理解と支援スキルの向上を目的としている。この支援では、先に依頼先へ相談シートを送付して得た支援者の情報と直接観察の情報を総合して、支援者に対する助言や提案を行っている。

途切れない支援を行うためには、卒業後も支援が必要と考えられるケースは、できれば在学中に卒業後も相談できるところと繋げておくことが大切である。

参加者の感想より

- ・ 困り感を持った子供たちを卒業後どのような期間につないでおくかが大きな課題となっています。そのような意味で、教育と福祉が連携することの重要性を改めて感じました。
- ・ 子どもの立場に立って行動を分析することで本質に迫ることができると感じました。また、本人や保護者の気持ちを優先することが支援を行う上で重要であることや就労において自己理解ができていることが必要であることも辻先生のお話を聞いて納得できました。

2022 年度 特別支援教育フォーラム

2022 年 10 月 26 日

和歌山大学特別支援教育

コーディネーターフォーラム事務局

info-seforum@ml.wakayama-u.ac.jp

第 111 回和歌山大学特別支援教育コーディネーターフォーラム

「教育現場でのスクールソーシャルワークの視点の必要性」

和歌山大学教育学部

古井 克憲

愛知教育大学教育学部

厨子 健一

10 月 26 日（水）18 時から、和歌山大学教育学部の古井克憲が担当し、愛知教育大学教育学部の厨子 健一氏をお迎えし講演しました。お忙しい中、40 名の方がご参加くださり大変有意義なフォーラムになりました。

講演内容

コーディネーター：和歌山大学 教育学部

古井克憲

子どもには、健康に生きる権利、教育を受ける権利、子どもらしく過ごせる権利がある。スクールソーシャルワークは、このような子どもの権利に則って、子どもの最善の利益のために、家族、教師、医師、児童相談所職員、近隣住民など子どもを取り巻く環境に目を向け、支援を展開していくことを重視している。

講師：愛知教育大学 教育学部

厨子健一

児童虐待相談件数の増加し続けている。また近年の調査では、貧困の度合いが高いほど学力に困難を抱えていると報告されている。子どもが大きな事件を起こす前は、学校で忘れ物が多くなる等の異変が見られるといわれている。このような状況に置かれている子どもに、教員だけで対応するのは限界があり、学校、地域全体で対応する必要がある。

2008 年度に文部科学省でスクールソーシャルワーカーの活用事業が始まった。スクールソーシャルワーカーは、いじめや不登校など生活指導上の課題に対応するため、教育分野に関する知識に加え、社会福祉の専門的な知識、技術を用いて、児童生徒の置かれた様々な環境に働きかけ支援を行う。

スクールソーシャルワークは、子どもの家庭、地域、学校などの生活環境上の様々な要因が複雑に絡み合った結果生じるものだという視点に立つ。そのため、スクールソーシャルワークでは、個と環境の相互作用に焦点をあて、人と人、人と制度をつなぎながら関係性の改善を目指して環境調整を行う。学校は子どもの家庭環境の見えにくさや保護者へのアプローチの方法などに悩みをもっている。スクールソーシャルワーカーは、家庭や地域などの子どもの環境に働きかけ、そこからアプローチして問題解決につなげる。スクールソーシャルワーカーと教員が連携することは、子どもの生活の質を高める支援を行うことができる。

スクールソーシャルワークでのアセスメントは、子どもの行動の背景や要因を情報収集して分析し、本人や家族の視点に立ってみる。そして、子どもや家庭の「強み（ストレングス）」を見つけ、強みを活かした支援ができないか考えることが重視されている。

参加者の感想より

- 子どもたちが抱えている問題は、生活環境上の様々な要因により生じるという視点で物事を捉え、環境調整を行ったり、人と人もしくは人と制度をつないだりして、関係性の改善を促すことが SSW の役割であると学びました。SSW はニーズを感じていない家庭に対しても、アプローチしていくのが仕事だと知ることができ、もっと SSW や SC 等と連携・協同して対応していく必要性を感じました

2022 年度 特別支援教育フォーラム 第 112 回和歌山大学特別支援教育コーディネーターフォーラム

2022 年 11 月 30 日
和歌山大学特別支援教育
コーディネーターフォーラム事務局
info-seforum@ml.wakayama-u.ac.jp

「生涯にわたる学びと自己実現・居場所・なかまづくりの試み」

和歌山大学教育学部 山崎由可里
麦の郷ゆめ・やりたいこと実現センター 尾方千春
藤本綾子
夕刻のたまり場につどっているみなさん

今回は、11 月 30 日（水）に、粉河の山崎邸から和歌山大学教育学部の山崎由可里が、麦の郷ゆめ・やりたいこと実現センター 尾方千春氏、藤本綾子氏をお迎えして講演しました。講演後は「夕刻のたまり場」に集っている皆さんにもお話を伺うことができました。お忙しい中、30 名の方がご参加くださり大変有意義なフォーラムになりました。

講演内容

講師：和歌山大学 教育学部

山崎由可里

2017 年、文科省は、障害者の学校卒業後の学びや交流の機会整備、生涯のライフステージを通じた学習活動の充実に向けて障害者学習支援推進室を設置した。2018 年、障害者の生涯学習活動に関する実態調査を行った結果、学校卒業後の学びの場が少なく、生涯において生じる課題等を解決するための学習の場や、地域で仲間と交流できる場が必要とされた。こうした現状を踏まえ、地方公共団体が民間団体等と連携し、発達段階や障害種に応じた障害者学習プログラムや持続可能な事業実施体制等のモデル開発を行い、障害者の生涯学習機会の整備・充実を図れるよう、学校卒業後における障害者の学びの支援に関する実践研究事業が開始された。和歌山県では「社会福祉法人一麦会」が採択され、今年度も継続して取り組んでいる。

今年度から県下で初めて紀の川市の複数の公民館において、障害のある人を対象にした公民館の主催講座が開設された。行政の役割として、国、地方公共団体は、全ての国民があらゆる機会、場所を利用して、自ら実生活に即する文化的教養を高めえるような環境を醸成するように努めることとされている。他の自治体でも講座が開設されることが望まれる。

講師：社会福祉法人 麦の郷 ゆめ・やりたいこと実現センター

尾方千春氏

藤本綾子氏

2018 年度から、「学校卒業後における障害者の学びの支援に関する実践研究事業」に採択されている。今年度は、「地域連携による障害者の生涯学習機会の拡大促進」を受託し行政と一緒に取り組んでいる。

ゆめ・やりたいこと実現センターでは、みんなの「ゆめ」や「やりたいこと」をみんなで実現できる場になるよう、ゆっくり話したり講座で学んだり、それぞれの居場所となる「夕刻のたまり場（居場所）」や、誰かが発信した、やりたいことや願いをみんなで経験する「やりたいこと講座」を開催している。また、関係機関や団体等と連携を図りながら活動を行うために連携協議会を開催している。

参加者の感想より

- ・仕事終わりにみんなで話をしたり、好きなことをしたりと、ほっとできる居場所「夕刻のたまり場」は、人と人がつながる安心できる温かい場所だということが、画面や写真の皆さんの表情から伝わってきました。余暇は、決められたものではなく、行きたい時に、したいことを自由にできるものであり、それができる山崎邸は、仲間に会えるかけがえのない場所だとわかりました。